

〔直訳〕

30 そこから 出て行って

彼らは通り過ぎていた ガリラヤを通過して、

そして 彼は望まなかった 誰かが知るようにと。

31 なぜなら彼は教えていた 彼の弟子たちに

そして 彼は言っていた 彼らに 次のことを

「人の子は 引き渡される 人々の手の中へ

そして 彼らは殺すだろう 彼を、

そして 殺されて、 三日の後に 彼は甦るだろう」。

32 だが彼らは 分かっていなかった 言葉を、

そして 彼らは恐れていた 彼に 尋ねることを。

33 そして 彼らは来た カファルナウムの中へ。

そして 家の中に 居て 彼は尋ねた 彼らに、

「何を 道において あなたがたは論じ合っていたのか」

34 だが彼らは 黙っていた。

なぜなら互いに 彼らは論じ合っていた 道において

誰が より大きい。

35 そして 座って 彼は呼んだ 十二人を

そして 彼は言う 彼らに、

「もし 誰かが 欲するならば 最初に あることを

彼はあるだろう すべてのの 最後で

そして すべてのの 仕える者」。

36 そして 取って 子どもを

彼は立たせた 彼（女）を 彼らの中央に

そして 抱いて 彼（女）を

彼は言った 彼らに、

37 「誰であれ このような子どもの一人を

受け入れるなら 私の名によって

私を 彼は受け入れる

そして 誰であれ 私を 受け入れているなら、

私を 受け入れない そうではなく 私を遣わした方を」。

〔新共同訳〕

30 一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好ま  
れなかった。31 それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三

日の後に復活する」と言っておられたからである。32 弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。

33 一行はカファルナウムに来了。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。34 彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。35 イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」36 そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。37 「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

### ①構成

#### ③ 30―32節

⑦これは二度目の受難予告であるが、30節に「誰かが知るようにと望まなかった」とある事から考えると、ただ弟子だけを対象にした予告である。

④31節に予告が述べられる。「引き渡される」は神が行方者であることを婉曲的に表す神的受動形と見られる。32節は「だが彼らは」で始まり、イエスの言葉を理解できない弟子たちの姿が描かれる。

#### ④ 33―34節

⑦この段落は31―32節と同じ構成になっている。まずイエスが「何を論じ合っていたのか」と問い、「だが彼らは」で始まる文章が続いている。このような繰り返しによって、弟子の無理解が強調される。

④また「道において」が33節にも34節にも現れる。これはカファルナウムへの「途上で」の意味だが、それだけでなく、十字架への「道」も意識されているだろう。いずれにせよ、イエスが受難を予告した「道において」彼らが互いに論じ合っていたのは、誰が最も偉いか、ということであった。このようなことにも弟子の無理解が現れている。

#### ⑤ 35―37節

⑦この段落では弟子が取るべき態度が「仕える者」と「受け入れる」（四度繰り返し返される）とによって表される。35節の未来形「彼はあるだろう」は命令を表しており、「皆の最後となり、仕える者となりなさい」の意味である。

### ②二度目の受難予告（30―32節）

#### ① 「そこから出て行って」

⑦「そこ」は、文脈から考え、山上での「変容（2―13節）」があった場所である。イエスと弟子は、そこを出発してガリラヤの町や村を通り過ぎ、カファルナウムに向かっている。しかも、30節の三行目に「誰かが知るようにと望まなかった」とあるから、誰にも気づかれぬように、ひそかに彼らだけで移動したことになる。

④その理由は31節が語るように、イエスは弟子たちだけに二回目の受難予告をしたかったからだ。第一回目の受難予告（八31―九1）は群衆もいるところで行われたが、今回は弟子たちに限

定しているのは、イエスの受難と復活は弟子のあり方を規定する決定要因となるからであり、特に弟子に語りたかったのである。

⑥第一回目の受難予告では、次のように述べられている。

必要である 人の子が 多くのことを 苦しむことが  
そして 拒絶されることが 長老と祭司長と律法学者によって  
そして 殺されることが  
そして 三日の後に 起きることが

「必要である」と訳された言葉によって神の計画にもとづく必然さを表しているが、第二回目では「引き渡される」（31節）というように受動形を使うことによってその必然性が表される（神的受動形）。イエスが「引き渡される」のは、神の意思にかなったことである（ロマ八32参照）。「だが、彼ら」はイエスの言葉を理解できない。そればかりか、無理解が暴露されるのを恐れて、尋ねることもできない。

◎引き渡す（パラダイドミ）

⑦「渡す・ゆずる・託す」。旅に出る主人は、僕に財産・タラントンを「預ける（託す）」（マタ二五14・20・22）。自分に「託された」すべての権力と繁栄を与えると云って、悪魔がイエスを誘惑する（ルカ四6）。「霊を渡す」は「死ぬ」（ヨハ一九30）、「命を渡す」は「命を賭ける」（使一五26）、「体を渡す」は「体を犠牲にする」を意味する（1コリ一三3）。

⑧裁判にかけたり、処刑するために「誰かを引き渡す・売り渡す・見放す」。引き渡される人物には洗礼者ヨハネ、訴えられている人、仲間を赦さない家来、イエスの弟子、迫害されるキリスト者、ペトロ、パウロ、罪を犯した天使があげられているが、用例が最も多いのはイエスである。イエスは、人々の手（31節と並行箇所）、祭司長・律法学者（マコ一〇33）、異邦人（マコ一〇33など）、ピラト（マコ一五1）、総督の支配と権力（ルカ二〇20）、罪人の手などに（ルカ二四7）「引き渡される」。イエスを「引き渡す・売り渡す」の意味で、ユダの裏切りを表す例も多い（マコ三19、マタ二六15、ヨハ六71他）。パウロにとって、主イエスは「わたしたちの罪のために引き渡された方」であり（ロマ四25）、神は「わたしたちすべてのために、自分の子を引き渡した方」である（ロマ八32）。

⑨「任せる・委ねる・決定を委ねる」。神の恵み・主の恵みに「ゆだねられる」の意味で、パウロとバルナバや（使一四26）、宣教に出発するパウロとシラスに使われる（一五40）。苦しみを受けたキリストは、正しく裁く方に「決定を委ねた」（1ペト二23）。

⑩口伝や成文化された伝承を「伝える・教える」。フアリサイ派が守る、昔の人の言い伝え（マコ七13）、ルカ福音書では初代教会でのイエス物語の伝承（ルカ一2）、ほかには初代教会の信仰告白・生活規則の伝承に使われる（1コリ一2・23、一五3、2ペト二21、ユダ3）。

⑪「許す・許可する」。「実が許す」は、穀物が実り、収穫の時が来たことを表す（マコ四29）。

### ③弟子たちの無理解（33―34節）

①a 「道において」

②カファルナウムに着いて、家に入ると、イエスは彼らが「道において」論じ合っていたことは、何かと尋ねる。「だが、彼ら」は沈黙していた。なぜなら、「道において」論じていたことは、

誰が最も偉いか、ということだったからである。

④ イエスが受難を予告していた「道」で、彼らはイエスを理解できなかったばかりか、最も偉いのは誰か、と論じていた。この「道」は十字架へと向かう道でもある。この道をイエスの「後に」従う者は、自分の望みを捨て、十字架を背負うべきであるのに（八34）、現実の弟子たちは自分を捨てることができずに、誰が偉いか論じ合っていた。

#### ④ 弟子のあるべき姿（35―37節）

##### ㉓ 仕える者

ディアコノスは「食卓で給仕する者」を意味するが、他人に対するあらゆる奉仕を指すために使われるようになり、特にキリスト者の根本姿勢を表すようになった言葉である。しかも、十字架は「仕えるために来た」イエスの奉仕の頂点であり、キリスト者の「仕える」はこの十字架から意味を得ることになる。弟子は「すべての最後であり、すべての仕える者であるだろう」とイエスは語るが、ここでの「最後」は最も地位の低い者の意味である。「仕える」キリスト者は社会の中で「最も地位の低い者」となるが、しかしそれが「最初の者」になる道である。なぜなら、イエスがその道を歩んだからである。

##### ㉔ 受け入れる

次に、イエスは弟子の取るべき態度を「受け入れる」を用いて教える。イエスは子どもを彼らの間に立たせて抱き、このような子どもを「受け入れる」者がイエスに受け入れられ、イエスが受け入れる者は神に受け入れられると述べる。ここでの「受け入れる」は「理解して受け入れ、手厚くもてなす」といった意味であろう。イエスが用いていたアラム語では、子どもを表す「タルヤー」は「僕」、つまり「仕える者」をも表す。イエスが手を取った子どもは「仕える者」の象徴であると同時に、力のない弱い者の象徴でもある。イエスは「力のない弱い者」として十字架に上り、すべての人に「仕える者」となる。そのイエスが「子ども」を抱いて、「受け入れる」ようにと弟子を招く。

##### ㉕ 最後の（エスカトス）

㉗ 名詞的に「末端・果て」、等級や序列に使われ、「最後の・最小の・最も価値のない」、時間に使われ、「最も遅い・最終の」を意味する。

① ルカ14章9・10節の「最後の場所」は、おそらく「末席」の意味で、宴会の主人から一番遠くにある座席を表すが、席のランクを指しているなら、「名誉ある席」と対比された「最低の席」。イエスは「最初の者が最後になり、最後の者が最初になる」と述べ、この世の序列を変えるような、神の支配について語る（マコ一〇31など）。

#### ⑤ 十字架への「道」について

イエスの二度目の受難予告との関連で、イエスに従う弟子のあるべき姿が語られ、「すべての最後であり、すべての仕える者である」ことが求められている。弟子は十字架への「道」を教えられ、それをイエスと共に歩んでいながら、最も偉いのは誰かと論じ合って、自分の地位にこだわり続ける。しかし、イエスはそのような弟子を捨てることなく、十字架への道を教え続ける。弟子たちが十字架の意味を悟り、すべての人に仕え、どんな小さな者をも受け入れることが、イエスの道だからである。